

# 長崎砂糖考(3)

本会幹事

村崎春樹

## 江戸時代の砂糖は、すべて輸入品であったのか

我国の砂糖の始まりは奄美大島の直川智(すなおかわち)が中国福建に漂着し、砂糖きび栽培と製糖技術を習得、さらに砂糖きびの苗をひそかに持ち帰り慶長15年(1610)に栽培を始めたと伝えられている。薩摩藩支配下の琉球では元和9年(1623)垣花村の儀間真常の家人が中国福建にて製糖技術を習得し琉球にて黒砂糖の製糖を始めた。正徳3年(1713)薩摩藩は大阪に黒砂糖を積み出した。宝暦4年(1754)平瀬徹斎の『日本山海名物図会』に全国各地の特産品が絵入りで紹介(下図参照)されており、その中で砂糖の項目で示されているのは、薩摩大島黒砂糖である。その説明には、「中国で作る白砂糖、氷砂糖は日本では出来ない」とある。

幕府は、当時の輸入品の対価として、初めは銀、次には金、銅を主な輸出品としていたが、これら鉱物資源が枯渇するに至り主要輸入品である砂糖輸入の抑制を図るため砂糖生産を奨励した。

その成果として最も目覚ましいのは、四国讃岐の高松藩で文化期(1804~18)には讃岐三盆白と呼ばれる良質の白糖が生産された。その生産規模は、天保5年(1834)に砂糖きび栽培面積1,120ha、同7年(1836)には1,380haへと拡大、さらに慶応元年(1865)に3,807haとなった。天保元~3年(1830~32)平均の大阪への出荷高は688万斤(4,128トン)を超え全国シェアの27%を占めた。全国シェアの51%を占める薩摩藩は、同じ、天保元~10年(1830~39)の出荷高1,320万斤(7,920トン)売上高は235万両となっていたが、その多くは黒砂糖であった。上記2藩について、四国の阿波268万斤(1,606トン)と続く。その他は紀伊、和泉、伊豫、備前、備中、備後、遠

江、駿河などであった。この天保期の大阪や江戸への砂糖集荷量は合計2,581万斤(15,485トン)であった。これらの事から、文化期以前は輸入された砂糖が主力であったが、次第に国産砂糖が主役となっていく事が窺える。また安政期(1854~59)には国内の生産地から直接に消費地へ流通するようになる。安政安政5年(1858)の高松藩の砂糖生産高は2,229万斤(13,374トン)であったが、西日本各地から大阪への集荷量は1,500万斤(9,000トン)で高松産が集荷量の半分と推定すれば750万斤(4,500トン)となり、生産量の3分の2は直接消費地で販売されたと考えられる。これらの事から、文化期より徐々に長崎から砂糖の輸入は減少していった。

## 砂糖の値段は、どのくらい(砂糖は国際通貨)

「江戸時代の砂糖は大変貴重なもので庶民の口には入らなかった」と云うのが通説ですが、元禄5年(1692)出島オランダ商館の医師であったケンペルは、京都における砂糖の小売価格を100斤(60kg)あたり140匁(現在の価格換算1kgあたり約1,600円程度)と記録している。同年の出島での輸入価格は、同じく100斤(60kg)97匁だった。43匁が国内流通経として上乘せされた計算になる。

さらに、元禄10年(1697)長崎会所が設立され、長崎での貿易がすべて長崎会所の統制による貿易になると輸入関税である掛り物が課税されるようになった。砂糖については200%の掛り物が課税されて輸入価格は元値の300%となった。大阪での小売価格は元値の500%近くの100斤あたり300匁で、元禄5年の約3倍となった。

江戸時代後期の文化5年(1808)に国産の砂糖が出廻り始め、出島での価格は100斤あたり69匁と下落するが、国内では投機の商品となり小売価格は100斤あたり660匁(現在貨幣換算で1kgあたり5,000円)を超えることもあった。この砂糖価格の下落は、長崎会所を痛撃する、輸入砂糖販売額の減少は長崎会所の掛り物(関税)も減少することになる。会所の収益は砂糖に大きく依存していたので影響は大きく、また長崎会所の減収は幕府への運上金の減少を意味した。(つづく)



薩摩大島黒砂糖  
 薩摩大島黒砂糖は、元禄5年(1692)出島オランダ商館の医師ケンペルが京都で100斤(60kg)あたり140匁と記録している。同年の出島での輸入価格は、同じく100斤(60kg)97匁だった。43匁が国内流通経として上乘せされた計算になる。